

研究論文

なぜ教職科目「教育原理」において教育思想史を学ぶのか  
—コメニウスの教育思想についての再検討—

谷 口 雄 一\*

The Purpose of Learning about History of Educational Thought at  
Principle of Education on a Teacher Training Course  
—A Re-examination about the Educational Thought of Comenius—

Yuichi Taniguchi

【要 約】

本研究は、教職課程及び教員養成課程における開設科目「教育原理」において教育思想史について学ぶことの意義について検討することを目的としたものである。

今回は、本学の教職科目「教育原理」において取り上げているコメニウスとルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、デューイなどの中から、近代教育学の父とされるコメニウス（Comenius, Johann Amos.）を取り上げ、その教育思想の基本的理念について再考した。

このことを通して、コメニウスの教育思想と、現在の日本の学校教育において重要なキーワードとされる「主体的・対話的で深い学び」との間に親和性が認められた。

このことは、GIGA スクール構想やICTを活用した教育を展開していくことが重要だと言われている現代において、教職を志す学生が教育思想やその歴史を学ぶ意義であると言える。

---

\* 摂南大学

## 1. はじめに

### (1) 教育原理における教育思想史と学生の持つ学修ニーズとの乖離

筆者は拙稿において、本学の教職科目「教育原理」において教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解することにより、自身の教育観を形成・変容させていくという教育思想史を学ぶことの本質的な意義に立ち返ることを試みた実践を紹介した。そして、OPPシート（One page Portfolio シート）<sup>1</sup>を活用することが、学生が自身の教育観の形成していく有効な手立てとなることを報告した<sup>2</sup>。

本学教職課程の「教育原理」は、教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解することが目標となる「教育の基本的概念」と、教育の歴史に関する基礎的知識を身に付け、それらと多様な教育の理念との関りや過去から現代に至るまでの教育及び学校の変遷を理解することが目標となる「教育に関する歴史」、そして、教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解することが目標となる「教育に関する思想」の3つの概念で構成される『教職課程コアカリキュラム』の「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に対応している教職科目である<sup>3</sup>。多くの教職課程や教員養成課程において「教育原理」や「教育原論」等の科目名で開講され、1年次または2年次の比較的早期に設定されていることが多く、教職課程及び教員養成課程の基盤を担う科目の1つであると言える。

本学では、2年次に履修することになっており、表1に示す通り、コメニウスをはじめとして、ルソーやペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、デューイの6名の教育思想家、教育実践家を主に取り上げている。

表1 「教育原理」のシラバス

授業計画	回数	授業テーマ	内容・方法 等
	1	ガイダンス： 教育とは何だろう	本科目の位置づけについて考えとともに、教育の基本概念を考えることの意味を考える。
	2	教育の基礎理論①：教育の必要性	なぜ、人間だけが教育を行うのかを考える。
	3	教育の基礎理論②：教育の目的	前回の授業をふまえ、「人間が人間になるために」とはどういうことか、教育の目的について考える。
	4	教育の基礎理論③：子どもの発見	子どもの意味や子どもをめぐる問題について考える。
	5	教育の基礎理論④：教師とは何か	教師という職業や、その教育的役割について考える。
	6	教育の基礎理論⑤：近代の学校の誕生	近代の学校はどのように誕生し、普及してきたのかを概観する。
	7	教育の基礎理論⑥：家庭と教育	家庭において子どもはどう扱われてきたのか、家庭における教育は子どもの成長にどのような影響を与えるのかについて概説する。
	8	近代の教育思想①：コメニウスの教育思想	コメニウスの教育思想について概観し、考察を加える。
	9	近代の教育思想②：ルソー、ペスタロッチの教育思想	ルソー、ペスタロッチらの教育思想について概観し、考察を加える。
	10	近代の教育思想③：ヘルバルト、フレーベルの教育思想	ヘルバルト、フレーベルらの教育思想について概観し、考察を加える。
	11	現代の教育理論①：デューイの教育思想	デューイの教育思想について概観し、考察を加える。
	12	現代の教育理論②：20世紀の教育理論	20世紀の教育についての諸理論について概観し、考察を加える。
	13	現在の教育課題①：学力問題	現在の教育課題の一つである学力をめぐる問題について概観し、考察を加える。
	14	現在の教育課題②：生涯学習の思想	現在の教育課題の一つである生涯学習について概観し、考察を加える。
	15	まとめ：今後の教育について考える	教育についてまとめるとともに、今後の教育について考える。

しかし、教職課程の基盤を担うという役割とは対照的に、教育原理を学ぶことに意味を見出せずにいる者が少なくない。筆者も「GIGA スクール構想や ICT を活用した教育に代表されるようにアクティブ・ラーニングが重要だと言われている現代において、大昔の教育思想や歴史を学ぶ意味は何なのだろうか？」という学生の声を耳にすることがある。履修する学生の学修ニーズとの間に乖離が生じていると言えるだろう。

## (2) 教員採用試験合格という目標がもたらす受身的で対話の無い浅い学び

また、拙稿において紹介したように、教職科目「教育原理」を担当する教員の中には、教員採用試験に合格させることを教育目標と捉える者もいる<sup>4</sup>。このため、「人名と書名の関連さえ覚えておけば」というような授業内容に陥っている授業も少なからず存在する。しかし、『教職課程コアカリキュラム』にあるように、教職科目「教育原理」の教育目標は、「教育の基本概念は何か、また、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたのかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解する」というものである。

ここで言う学びとは、人名や書名を断片的に知ることでない。理解するということも、単に暗記するということではない。履修する学生が教員として学校現場に赴任した際に、児童生徒と一緒に教育活動を展開していくための基盤となるために、「教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解する」わけであり、「教育の歴史に関する基本的知識を身に付け、それらと多様な教育の理念との関わりや過去から現代に至るまでの教育及び学校の変遷を理解する」わけである。また、「教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解する」わけである。

## (3) 本研究が目指すもの

本稿ではこのような状況に鑑み、教職科目「教育原理」において教育思想史を学ぶ目的について再考する。そして、教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解することにより、自身の教育観を形成・変容させていくという教育思想史を学ぶことの本質的な意義に立ち返ることを試みたいと考えている。

そこで、本稿では、本学教職科目「教育原理」において主に取り上げている教育思想家、コメニウスとルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、デューイの6名の中から、今回、コメニウス (Comenius, Johann Amos.) に注目し、次の手順で考察を進める。

- ・コメニウスの教育思想の基本的理念について再考する。
- ・本学教職科目「教育原理」において取り上げているコメニウスの著作『大教授学』及び『世界図絵』を概観し、コメニウスの教育観について考察する。
- ・上記2つの考察を通して、現在の日本の学校教育の重要なキーワードである「主体的・対話的で深い学び」との関連について明らかにする。

## 2. コメニウスの教育思想の基本的理念

コメニウス (Comenius, Johann Amos 1592～1670) は、現在のチェコ共和国に生を受けた教育家である。そして、ルター (Luther, Martin 1483～1546) に先立って教会改革を訴えたフス (Hus, Jan 1369～1415) の流れをくむ神学者でもある<sup>5</sup>。

コメニウスは、教科書をはじめとする教育に関する書籍を数多く著し、後世に残している。教職課程では、近代的な教授学、そして、教育学の祖として紹介されることが多い。「あらゆる者に、あらゆることを、あらゆる手段を駆使して学ばせよう」とのコメニウスの主張は、19世紀以降の欧米諸国において公教育の制度が確立していく過程における先駆的なモデルとして注目されている。このため、ヨーロッパでは「諸国民の教師」と称され、誕生日である3月28日は、祖国のチェコ共和国では「教師の日」として制定されている。また、我が国においても、「あらゆる者に」との考えは、1872年の「学制序文」(被仰出書)に見られる「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」という「国民皆学」の理念を先取りするものとされている<sup>6</sup>。

### (1) コメニウスの教育的軌跡

コメニウスは、最大の宗教戦争といわれる三十年戦争 (1618～1648) によって祖国を追われ、ポーランドやイギリス、オランダ、スウェーデン、現在のハンガリー東部のトランシルバニアなど各地を流れ歩いた。その最中、当時の知識の混乱の解決のためにパンソフィア (汎知学) を構想した。そして、この原理に基づいた教育の改善を提唱し実践した<sup>7</sup>。

1631年に出版された『開かれた言語の扉』は、『世界図絵』の元となった教科書であり、17世紀には聖書に次いで読まれたと言われるほど普及した。1656年には、『遊戯学校』を著している。これは演劇を通して言語を学ぶ教科書であり、実際に上演している。これは、学校において児童や生徒が劇を上演する学習発表会や学芸会の起源と言えるものである。1658年には世界初の挿絵入り教科書とされる『世界図絵』を出版した。これは、より年齢の低い子どもにも理解できるように作られたものであり、その後も挿絵や構成に改訂が加えられながら普及している。ドイツの文豪ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von 1749～1832) の幼少期の愛読書にもなったと言われている<sup>8</sup>。

このように、様々な教科書を出版しているコメニウスだが、1638年には、あらゆる者に、あらゆる事柄を教授する普遍的な方法を提示することを目的とする教育書『大教授学』を完成させている。『大教授学』では、教育の目的や教育課程、教授方法、学校制度などが示されており、国民教育制度が普及し始めた19世紀後半以降、様々な国の言葉に翻訳され、読まれることとなった<sup>9</sup>。

### (2) コメニウスの教育思想の基本的理念～パンハイディア～

パンパイディア (PAMPAEDIA) はコメニウスがギリシャ語から作った造語で、パンとパイディアという2つの側面からできている。

パンとは、「あまねくすべて」という意味であり、あらゆる者に、あらゆる事柄を、あらゆる側面からといった3つの意味が包含されている。また、パイディアとは、人間を未開な状態か

ら抜け出すことができる営みとしての教育を示している。つまり、パンパイディアとは、全人類の普遍的な教育のことである<sup>10</sup>。

「あらゆる者に、あらゆる事柄を、あらゆる側面から教育する」といったコメニウスの教育思想は、このパンパイディアという言葉に結実していると言える。だが、残念なことにコメニウスは、自身の教育的な思想を『パンパイディア』という著書にまとめているが、未公刊に終わっている。

#### ①あらゆる者に

コメニウスは、社会階層や民族、地域、性別、年齢、障害のある・無しなどに関わらず、あらゆる者が学ぶべきであると主張している。つまり、貴族でも身分の低い者でも、裕福な者でも貧しい者でも関係がない、都市に住んでいる、田舎に住んでいる等どこに住んでいるかも関係がなく、男性でも女性でも（最近ではトランスジェンダーも当然含まれる）、など、どのような差が存在していても、全ての人にとって教育が必要だということである。

また、年齢に関わって、コメニウスは、学齢期を4段階に分け、それぞれの段階の学校教育の在り方について述べていると同時に、人間の一生を誕生する前から死に至るまでの8段階の学校と捉えている。このため、コメニウスは生涯学習について最初に提唱した中の1人とされている。

#### ②あらゆる事柄を

コメニウスが示すあらゆる事柄とは、ただ単に多くのことを学ぶということではない。物事を成り立たせている原理や規則に基づいて学ぶということである。

教育思想家であると同時に神学者でもあるコメニウスは、人間は神から、世界と精神、聖書という3つの書物、神の3書を与えられているのだと考えている。同時に、それぞれの書物を読むために、人間は神から感覚、理性、意志（啓示）という能力を生まれながらにして与えられていると説明している。

ルネサンス期においては、古典に基づいた言語についての学習が教育の中心であった。また、宗教改革期には、聖書が盛んに読まれるようになり、教義をめぐる論争がそれまでになく激しさを増すようになった。このため、当時の科学者は、事物について研究することを通して聖書に記されている内容についての論争を解決できるのではないかと考えた。

この一連の流れに、当時の、文字による知識から事物による知識へと、知識についての見方が変化しようとしていた様子が認められる。このため、コメニウスは、このような知識についての見方の変化について捉え、感覚を教育の始まりとして重視している。

しかし、感覚が信頼できない場合もある。このため、コメニウスは感覚ばかりではなく理性を鍛えることが重要であると考えている。

ところで、読者のみなさんは、頭では分かっているやってしまう、または、できないということはないだろうか。また、何かについて、知らず知らずのうちに偏見や先入観を持っていて、さらに、それらについて、なかなか克服できないこともあるのではないだろうか。このことについてコメニウスは、感覚と理性を育てるだけでは不十分であり、信仰によって意志を鍛えることが重要であると考えている。

そして、感覚と理性、意志の3つについて、調和的に育てることを強調している。

### ③あらゆる側面から

コメニウスは、人間の存在を3つの段階で捉え、頭で考える、言葉で表現する、身体を動かすことによって人間の存在は確かなものになると考えている。このことが、コメニウスの教育方法についての基本原理である「知恵の三角形」である。

頭で考え、言葉で表現し、身体を動かすということで調和の取れた人間形成を図ろうとコメニウスが考えていたことは、1656年に出版された『遊戯学校』に代表されるように、学ぶべき言語を台本にして劇化し、演じることを通して学ぶといった教育実践によく表れていると言えるだろう。

## 3. 『大教授学』

コメニウスは、1638年に教育書『大教授学』を完成させている。この教育書は、あらゆる者に、あらゆる事柄を教授する普遍的な方法を提示することを目的としており、教育の目的や教育課程、教授方法、学校制度などが示されている。国民教育制度が普及し始めた19世紀後半以降、様々な国の言葉に翻訳されて読まれることとなった教育書である。

### (1) 『大教授学』の構成

コメニウスが著した教育書『大教授学』は、全33章の構成となっている<sup>11</sup>。

- ・教育の目的と内容（第1章～6章）
- ・学校教育および全民就学の必要（第7章～10章）
- ・学校に対する批判とその改革（第11章～12章）
- ・新しい教授学の原理（第13章～19章）
- ・各教授法や注意点（第20章～25章）
- ・学校について（第26章～32章）
- ・普遍的な教授方法の実施にとりかかる必要な諸条件（第33章）

### (2) 集団での教育の意義

教育方法学や学級教授論について研究する熊井将太は、「互いに手本となり刺激となり合う場合にこそ、学業の成果も楽しさも倍加するのでありますから。申すまでもなし、ほかの者が行なうところを行い、その行くところに行く。さきに歩む者に従い、あとに続く者の前に行く、これがいちばん自然な姿なのです」とコメニウスが『大教授学』において集団での教育の意義について述べている記述に着目している<sup>12</sup>。

熊井は、前述の記述から、コメニウスが「学習の楽しさ」と「相互の教え合い」といった2つの観点から集団で学ぶことの意義を捉えていると述べている。

まず、「学習の楽しさ」について熊井は、「集団で学ぶことによって学習が楽しく、刺激的なものとなること」が、子どもたちの折檻場や知能の拷問室と揶揄された当時の教育現場の実態を生徒にとって親しみやすく、楽しくするために重要だったと考察している。

次に、「相互の教え合い」について熊井は、「コメニウスが最も重要としたのは知識の定着であった」ことを指摘している。そして、「コメニウスは生徒が学んだことを他者に示し、説明することで、より深く記憶に刻み込まれることができると考え、生徒相互の教え合いによる反復と習練を重要視した」<sup>13</sup>と述べている。

昨年、新型コロナウイルスの感染が拡大し、2月の終わりに当時の安倍晋三総理大臣が全国の小学校や中学校、高等学校に一斉休校を要請した。休校期間は最長約3か月に及び、その間、児童生徒は個人での学習を余儀なくされた。オンラインでの学習を実施する学校も見られたが、ごく一部であった。設備面や活用力の問題から、小学校を中心に教科書やプリントなどを届けるといった対応しかできなかった学校も多く見られた。休校期間中、それまで当たり前だった学級の仲間との競争や教え合いという集団で学ぶことができず、結果、学ぶことの意義を見出せなくなった児童生徒も存在している。やはり、集団で学ぶことの意義は大きい。また、教職課程を履修する学生にとっても、コメニウスの教育思想を学び、集団での教育の意義を理解することは大変重要であると筆者は考える。

#### 4. 『世界図絵』

コメニウスが1658年に出版した『世界図絵』は、1631年出版の『開かれた言語の扉』が基となっている世界初の挿し絵入りの教科書である。表2にあるように、自然や人間、社会全般について150項目に分類されており<sup>14</sup>、それぞれの項目に対応した絵が挿入されている。絵の中には番号がふられており、それぞれの事物について母国語と外国語で説明が書かれている<sup>15</sup>。

表2 『世界図絵』の150項目

1 神	31 這う虫	61 仕立て屋	91 書法	121 主従社会
2 世界	32 両棲類(りょうせいいるい)	62 靴屋	92 紙	122 都市
3 天空	33 川と湖の魚	63 大工	93 印刷術	123 都市の内部
4 火	34 海の魚と貝	64 左官	94 本屋	124 裁判所
5 空気	35 人間	65 機械器具	95 製本屋	125 犯罪者の身体刑
6 水	36 人間の七つの年齢段階	66 家	96 本	126 商売
7 雲	37 人間の身体	67 鉱山	97 学校	127 計量と重さ
8 大地	38 頭と手	68 鍛冶屋(かじや)	98 書齋	128 医術
9 大地の作物	39 筋肉と内臓	69 指物師(さしものし)とろくろ細工師(さいくし)	99 文辞	129 埋葬
10 金属	40 脈管と骨格	70 陶工	100 楽器	130 演劇
11 石	41 外部と内部の感覚	71 家の部屋	101 哲学	131 奇術
12 樹木	42 人間の魂	72 居間と寝室	102 測量術	132 格闘練習場
13 果樹	43 変形と異常発育の人	73 井戸	103 天球	133 球技
14 花	44 造園	74 浴場	104 惑星の位置	134 盤上遊戯
15 野菜	45 農耕	75 理髪店	105 月の状態	135 競走
16 穀物	46 牧畜	76 馬小屋	106 日食・月食	136 少年の遊び
17 灌木(かんぼく)	47 蜂蜜製造	77 時計	107 地球	137 王国と属州
18 動物と鳥	48 製粉業	78 絵画	108 ヨーロッパ	138 王の尊厳
19 家禽(かきん)	49 パン製造	79 鏡	109 倫理学	139 兵士
20 啼鳥	50 漁獲	80 おけ屋	110 英知	140 陣営
21 野鳥	51 捕鳥	81 網づくり人と革ひも屋	111 勤勉	141 軍隊と戦闘
22 猛禽類(もうきんるい)	52 狩り	82 旅人	112 節制	142 海戦
23 水鳥	53 肉屋	83 馬に乗る人	113 勇気	143 都市包囲(としほうい)
24 昆虫	54 料理	84 車両	114 忍耐	144 宗教
25 四足動物及び家畜、その一	55 ぶどうの収穫	85 運送	115 人間性	145 異教
26 家畜	56 ビール醸造	86 渡し場	116 正義	146 ユダヤ教
27 役畜(えきちく)	57 会食	87 水泳	117 寛大	147 キリスト教
28 野生の畜群	58 織物づくり	88 ガレー船	118 結婚	148 マホメット教
29 野獣	59 繻布	89 貨物船	119 親類関係の系統樹	149 神の摂理
30 爬虫類(はちゅうるい)	60 亜麻布	90 難破(なんぱ)	120 両親	150 最後の審判

### (1) 学習の楽しさを喚起する教材

コメニウスの研究者である井ノ口淳三は、『世界図絵』の意義についての論稿において、絵本作家のヒューリマン（Hürlimann, Bettina. 1909～1983）による『世界図絵』への評価を紹介している。それは、「本というものを知らず、世界については自分の住む、戦争にふみにじられたみじめな環境しか知らないまったく単純な子どもにとっても、また、単語、数学、格言の丸暗記ばかりさせられていたもう一方の子どもにとっても、そぼくな木版画の挿し絵をたっぷり入れた、わかりやすいこのささやかな本の出現は、いわば一つのセンセーションであった」<sup>16</sup>というものである。その上で、『世界図絵』の挿絵について、井ノ口は、「読む者に興味を持たせ内容の理解を助けるさし絵としての役割を果たすもの」<sup>17</sup>と、評価している。

井ノ口が「読む者に興味を持たせ」と述べているように、当時の子どもたちにとって、言葉だけでなく絵が挿入されたこの教科書は、学習意欲を呼び起こされる書籍であったに違いない。しかし、このことは現在の日本の教育現場も変わらないと言える。新しい学年になった児童生徒には4月に教科書が配布される。真新しい教科書を手にすると同時に、児童生徒は、どんなことを学ぶのだろうかと新学年での学びについて展望する。教科書は、昔も今も児童生徒の中に学ぶことの楽しさを喚起する教材なのである。

### (2) 学習内容の系統性

コメニウスは、統一的な知識体系を構築し、人類の共通の陶冶財とすることによって、長年の戦争による社会の後輩を改革し、世界に平和をもたらそうと考えていた。このため、自然と人間と神について網羅する統一的で普遍的な知識体系をまとめようと考えた。この思想が汎知学である。

『世界図絵』で示されている150項目について、井ノ口は、「一見無秩序に思える項目の順序が、実はコメニウスの描く汎知学の全体像に見事に重なるものである」と述べている。そして、「すべての事柄を関連づけて教えることが肝要」といったコメニウスの教授学や、「百科事典の断片から統一的体系に至る道を提供する」<sup>18</sup>という汎知学、これらの全体像を示す著作であることを指摘している。

現在の日本の学校教育では、各教科等において児童生徒が学習する領域や分野、内容について、学習指導要領によって規定されている。そして、1つ1つが独立しつつも相互に関連性がある。このため、校種や学年によって分断されるのではなく、系統性に基づいて配列されている。コメニウスが著した『世界図絵』は、教職課程を履修する学生にとって、この学習内容の系統性について目を向ける学習材であると筆者は考えている。

## 5. コメニウスの教育思想に見られる「主体的・対話的で深い学び」

我が国では、平成29年3月31日に学校教育基本法施行規則が改正され、同時に、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領、中学校学習指導要領が公示された<sup>19</sup>。また、平成30年3月30日には、高等学校学習指導要領が公示され、学校教育基本法施行規則の関係規定についての改正が行われている<sup>20</sup>。これらの学習指導要領改訂の基本方針の柱の1つが、「主体的・対話的で深い



学び」の実現に向けた授業改善の推進である。ここでは、前項までの考察を踏まえ、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』に提示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む際に留意すべき6点<sup>20</sup>を手がかりにしながら、コメニウスの教育思想に見られる「主体的・対話的で深い学び」について整理したい。

#### (1) コメニウスの教育思想に見られる主体的・対話的な学び

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』には、「エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること」<sup>21</sup>という留意点が書かれている。この一文は、主体的な学び、そして、対話的な学びに関する記述である。

この中の「単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し」ということは、コメニウスの『世界図絵』から学生が学ぶことができる学習内容の系統性が大きく関わっていると言える。児童生徒にとっての主体的な学びを実現するために、単元や題材などを児童生徒が見通すことができる系統性のある授業づくりや単元構成が重要である。

また、「グループなどで対話する場面をどのように組み立てるか」ということについては、履修する学生にとっては、コメニウスの教育思想の中心である集団での教育とその意義が大きな支えとなるだろう。児童生徒は対話の中で、学んだことを他者に示し、説明する。時には、自身の経験や価値観を表明することもある。このような対話的な学びを通して、児童生徒は知識を定着させるとともに、多面的・多角的な思考を得ていくのである。

また、対話は、児童生徒にとって学び合う機会であると同時に、競い合う場でもある。児童生徒の中にある競争心は、主体的な学びへとつながっていく。

#### (2) コメニウスの教育思想に見られる深い学び

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』には、「オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捕らえる視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること」<sup>22</sup>と、深い学びを実現するための留意点が示されている。

ここでは、「見方・考え方」という言葉が3箇所が登場し、「各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」とされている。GIGA スクール構想やICTを活用した教育に代表されるアクティブ・ラーニングが重要だと言われる現代において教育思想や歴史を学ぶこと、その本質的意義について理解することができた学生は、教職に就いた際には、この各教科を学ぶ本質的な意義についても理解することができる。そして、各教科を学ぶ本質的意義に基づき、児童生徒が「見方・考え方」を働かせる深い学びを展開しようとするだろう。

## 6. 終わりに～「教育原理」において教育思想史を学ぶ意義～

本研究は、『教職課程コアカリキュラム』の「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に対応する教職科目「教育原理」などにおいて教育思想史を学ぶ目的について再考することを目指し、本学教職科目「教育原理」において主に取り上げている6名の教育思想家の中からコメニウスの教育思想に注目し、考察を進めてきた。

最後に、本学教職課程「教育原理」においてコメニウスの教育思想について学んだ際に学生がOPPシートに記した感想を一部紹介したい。

- ・教育思想は今でも語られ、教育の根本として存在しているので、今でも学ぶことはあると分かって、改めて昔はすごいと思った。
- ・1592～1670年という日本では戦国・江戸時代に生まれたコメニウスの教え方が今の教育でも通じるものがあるのはすごいことだと思った。
- ・物事の性質を捉える練習を知らず知らずの内にやっていたことを知ったことで、教育の奥深さを改めて知った。
- ・現在で言うアクティブ・ラーニングのような考えが近代にあったのは知らなかった。感覚、理性、意志がどれ一つ欠けることや突出するようにならないように大学生を送っていききたい。
- ・近年よく言われる手法も、「知恵の三角形」に基づいていたことが分かりました。正に、温故知新されていると感じました。

これらの記述には、『教職課程コアカリキュラム』の「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」における教育の基本的概念と教育に関する歴史、教育に関する思想の各々の一般目標を満たす学びを履修する学生が得ている様子が認められる。

今後は、本学教職科目「教育原理」において主に取り上げている残り5名の教育思想家、教育実践家であるルソーやペスタロッチ、ヘルバルト、フレーベル、デューイについても、彼らの教育思想や教育実践について学ぶ目的について再考したいと考えている。

### 【註】

- 1 OPPシート（One Page Portfolioシート）については、次の文献が詳しい。堀哲夫『新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版、2019年。
- 2 谷口雄一「教育思想史による教職課程履修学生の教育観の形成の在り方－OPPシートを活用した自己評価と教育観の形成－」『摂南大学教育学研究』第16号、2020年、1-10頁。
- 3 教育課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会『教職課程コアカリキュラム』2017年、11頁。
- 4 前掲2、2-3頁。
- 5 伊藤潔志 編『哲学する教育原理』教育情報出版、2019年、20頁。

- 6 相馬伸一『ヨハネス・コメニウス 汎知学の光』講談社、2017年、13頁。
- 7 前掲5、20頁。
- 8 前掲6、13頁。
- 9 前掲5、20頁。
- 10 前掲5、20頁。
- 11 コメニウス（鈴木秀勇 訳）の『大教授学1』明治図書、1978年。と『大教授学2』明治図書、1979年。を参考に、筆者が構成を分類した。
- 12 熊井将太「近代教授思想における学級教授論の構造と変容」『教育方法学研究』第34巻、2008年、79頁。
- 13 前掲12、80頁。
- 14 J.A. コメニウス（井ノ口淳三 訳）『世界図絵』平凡社、1995年、28-333頁。
- 15 前掲6、12頁。
- 16 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年、151-152頁。
- 17 前掲16、156頁。
- 18 前掲16、167頁。
- 19 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』東山書房、2018年、2頁。
- 20 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』東洋館出版、2019年、2頁。
- 21 前掲19、2頁。
- 22 前掲19、2頁。